



外来語 に学ぶ

荒川惣兵衛著

鈴木正編集

新泉社

外来語 に学ぶ

荒川惣兵衛著

鈴木正編集

新泉社

外来語に学ぶ

1980年9月16日・第1刷発行（初版 2000部）

定価＝1500円

著者＝^{あらかわ せいべい}荒川惣兵衛

編者＝^{すずき ただし}鈴木 正

発行所＝株式会社 新泉社

東京都文京区本郷 2-15-20

振替・東京 7-160936番 電話（812）1662

印刷・松沢印刷 製本・今泉誠文社

序

徳薄く、学浅く、学会に顔を出したこともない私は、野に在って静かに天を楽しむことを望んでいながら、そう達観もできず、いまにはびこる曲学、邪学を白眼視しつつ、空しく朽ち果てる自分を慨いていました。

このたび、鈴木正教授の温い交誼を得て、散佚せんとしつつあった諸稿が刊行に至ったことは、枯木に花が咲いた感じで、筆者として望外の喜びであります。

この上は、江湖博雅の読者諸氏に、一人でも多くご一瞥を願ひ、ご叱正たまわりますよう、お願い申し上げます。

一九八〇年七月

あらかわ そおべえ

外来語に学ぶ 目次

序——1

凡例——4

I

一 コミュニケーションと文化、それらの伝統——6

二 現代文章と外来語——12

三 外来語、世界語——30

四 外来語あれこれ——44

五 外来語の効用——57

六 外来語排斥論駁論——67

七 昭和の外来語——77

八 中国語を語源とするヤマトコトバ——115

II

- 一 外来語のはなし——132
- 二 日本地名中の外来語——148
- 三 外来語小典——152
- 四 わたしと外来語——167
- 五 外来語研究五十年——184

解説にかえて 荒川惣兵衛と『外来語辞典』——鈴木 正——204

荒川惣兵衛文献誌——229

編者あとがき——235

凡例

一、本文の表記法については、著者独特の、ない書きを、読者の便を考え、適宜漢字に直した。

一、戦前の論文中、旧漢字・旧かなを、当用漢字・新かなに改めた。

I

一 コミュニケーションと文化、それらの伝統

会話、電話や、ラディオ、テレヴィのなま放送などは、ほとんど同時に、話し手から聞き手へつたわるとみてもよいが、しかし、録音、文字はもちろん、いまいった会話、電話、なま放送でさえも、厳密に言えば、そもそも、すべてコミュニケーションなるものは、時間のながれにしたがつてつたわるものである。これこそがコミュニケーションの根本原則のひとつである。話されざるまえに、聞くことはできないし、書かれざるまえに読むことはできないのである。コミュニケーションは、過去から現在、未来へとつたわるものであって、けっして未来から現在、過去へと逆行してつたわるものではないのである。きょう話す話はずきのうは聞けない。あす書く手紙は、きのうも、きょうも読めない。私たちは先祖のいったことばを先祖につたえることはできない。私たちが現代人は、タイム・マシーンをつかっても、古事記びとや万葉びとに、私たちのことばや

文字をコミユニケイトすることは、ついに不可能である。私たちが私たちのことばや文字をコミユニケイトしうるのは、私たちと同時代人または以後の世代のひとびとに限られているのである。なるほど、私どもの先祖は漢字漢文をつかっていた。それで、その漢字漢文の古文を読むためには、漢字漢文をもちいなければならぬ、ということはないのである。ちょうど、仏教をまなぶため、サンスクリットをまなびはするが、そのサンスクリットで、たれかれのさべつなく、手紙を書かないのとおなじである。

私どもから、漢字をやめて、かながき、またはローマ字がきにしようが、過去のひと（先祖）から、かれこれいわれることはまったくなく、私どもの自由なのである。私どもから漢字をやめて、かながき、またはローマ字がきにしたりして、コミユニケーションは、すこしも妨げられず文化はけっしてたちきられはしないのである。

往年トルコのケマル・パシャ（本名アタチュルク）は、一朝にして、トルコ文字を廃し、ローマ字を国字としたが、文化もその伝統も、すこしもたちきられはしなかった。けだし、文化もその伝統もけっして固定したものでなく、万物とひとしく、流転し、変遷し、発展してゆくものである。いかなるいまも、いまはつねに過渡期である。きょうもあすとなれば、歴史の一ページとなる。歴史は過渡期の連続である。過渡期ならざる日は、一日もない。これはけっして奇説でも

逆説でもなく、シャカムニ仏の諸行無常のおしえ、そのものである。

現にいま問題にしている日本の文字の歴史、伝統をふりかえってみても、いつまでも古事記式、万葉式の漢字がきではなかった。カタカナ、ひらがなが発明され、漢字かなまじり文に発展し、さらに、カナモジ文、ローマ文字もあらわれてきている。かくのごとく、日本の文字もけっして固定していずに、改良され、発展し、変遷してきている。

いたずらに伝統にこだわっては、進歩発展は期しがたい。よきをとり、あしきをすててこそ、進歩発展はあるのである。

もし古い伝統を重んぜよというならば、こんにち、手紙も新聞もいつさい古事記式、万葉式の漢字をつかえということになる、いな、もっとふるいレタレスエイジ（無文字時代）にかえれということになるが、はたしてそれでよいだろうか？

たしか論語にも「辞は達するのみ」といつてある。ことばも文字もコミュニケーションのメディアである。あいてにわからぬことばや文字をつかうことは、言語道第一の違反であり、コミュニケーションの自殺行為である。だから、「やさしいことば、やさしい文字をつかえ」ということになる。

コミュニケーションのメディアとしてのことば、文字の変遷、改革に、もつとも参考になるのは、度量衡の単位の変遷、改革である。私どもの祖父母はもちろん、父母もメートル法はおそら

くつかったことがなからう。しかし私どもの子、あるいは孫たちは、ぜんぶメートル法をもちいている。たぶん尺貫法はしらないであろう。このあいだに度量衡の単位は、完全にいれかわった、つまり改革されたわけであるが、きわめてスムーズにおこなわれた、なんらの混乱も起こらなかった。ことばや文字もこのとおりだとおもう。

歌は世につれ、世は歌につれ、といわれるが、まさにことばも文字も、世につれるものである。なぜならば、ことばは自然、人生、社会（の心にうつったすがた）を如実にうつす鏡であり、文字はそのことばをうつす写真のようなものであるからである。

しおとうじ（潮湯治）が海水浴となり、活動写真が映画となった。ガラスということばも、吹玉、水精、玻璃（梵語）、ビードロ（ポルトガル語）、ギヤマン、ガラス（ともに、オランダ語）、グラス（英語）となり、チーズも酥、醍醐（梵語）、カーズ（オランダ語）、チーズ（英語）となった。その他すこしあげれば、

ポルトガル語

オランダ語

英語

カピタン

カピテイン

キャプテン

キリシタン

キリシテイン

クリスチャン

ドミンゴ

ドンタク

サンデー

ハーカ

メス

ナイフ

ハライズ

パラデイス

パラダイス

ビスコウト

ビスコイト

ビスケット

ポマタ

ポマーデ

ポマード

マンティカ

ヘット

ラード

ラベイカ

ヒヨール

ヴァイオリン

セーデル

サイダー

ドゼイン

ダース

ハルシケルム

パラシュート

ポートル

パタ

ポンス

ポンチ

メリキ

ミルク

モイル

スリッパ

ラクムス

リトマス

ルーフル

メガホン

ロベイン

ルビー

ポマード、ヴァイオリン、サイダー、パラシュート、スリッパ、メガホン、ルビーの類が一〇

○年以上もまえに輸入されたことは、興味ふかいとおもう。

「汽車のかま」が蒸気機関車となり、最近SLとよばれて、なごりをおしまれつつ姿を消さんとしていく。「いろどりあざやかな」は多彩となり、カラフルとなった。「みせびらき」は開店となり、オープンとなった。「やわらかい」が柔軟となり、ソフトとなり、「わかもの」は青年となり、ヤングとなった。

前述のごとく、何事もかわる。ただよいほうにかわれればよいので、よいほうにかわるよう、いのるのみである。

人間の衣食住をはじめ、科学、芸術、思想、知識、文化百般、上古、中古とくらべて、現代および将来は、無限に進歩発展してゆくであろう。こういう世の中においては、コミュニケーションのメディアは、しだいにむずかしくなっていくても、しかたのないことにおもわれる。しかるに、むしろ、逆に、やさしくしよう、簡易にしよう、というのである。こんなにありがたいことはないではなからうか？

愛国心や国粹主義のため、漢字を守ろう、とするひとは、あたまをすこしひやすか、洗脳するか、精神病院へ入院する必要があるらう、とおもう。

『英語教育』一九七四年九月号

二 現代文章と外来語

一 外来語氾濫時代

現代は外来語氾濫時代であるといわれる。実に現代日本語の最大特徴は、他のいかなる現象よりも、まず外来語がさかんにもちいられることである。新聞・雑誌・書籍にも、雑誌・書籍や文芸作品のタイトルにもベースボール・ボキシング・水泳等のラジオ放送にも、デパートの商品案内、カフェーのメニュー、音楽会や小学校の運動会のプログラム、飲食物のレットルにも、幼児の絵本にも、漫画にも、うまやいぬ（エス、ジャック、ジョン、ディック等）の固有名詞にも、いな、国定教科書にも、和歌や俳句や川柳や流行歌にもおよそ、日本語のもちいられるところ、外来語をもちいないのはほとんど絶無である、といっても決して過言ではなかるう。いわば、外

来語をはなれて現代文章はありえない。こころみに現代文学から外来語をのぞいたら、伏字だらけになって、その作品は破壊されるであらう。実に、外来語が日本語をおびやかすにあらざして、外来語を排斥することが日本語をおびやかす、といった方がただしという実際のありさまである。さてこの、現代における外来語輸入は決して日本のみでなく、世界共通の現象であり、「各国とも前代未聞の盛況を呈している」(石黒魯平「散詞交錯時代」)。

この外来語氾濫は国際生活の当然の結果にすぎない。なんとすれば、外国と交通し外国語に接することがなければ、外来語は決して生じないからである。外国語でなかった外来語はよに一語もない。

二 外来語の意義

外来語とは国語化した外国語の謂である。(C. O. D. denizen "naturalized foreign word")、すなわち、外国語の、ある語の音と意義とを一緒にそのまま借用したもの、言語学上いわゆる音訳借用語のことである。勿論、外来語は国語である。そして「古今外来語のない国語はない」とは言語学のあやまりなき定説である。わが国語も古往今来外来語にとむ。いな、国語の創成がすでに混合語の達成であった、とさえいわれる。ヤマト民族が土着にあらず、タカマガハラよりきたつ

たものであることをおもえば、けだしその辺はそんなものであつたらうとおもわれる。

古来、日本の外来語中もつともおおきな資源は支那語である。「教育ある日本人は支那からきた語をもちいなくてはほとんど一文をもつくることはできない」(Sapir "Language" p. 207)。しかも従来純粹の日本語とおもわれている語も、実は大抵支那語(もしくはその他)からきた外来語であるようにおもわれる。ワ(レ)、ナ(レ)は我 [we] 汝 [ni] ソ、ホ、チは十 [so] 百 [pa] 千 [tsie] アフは合 [ah] ノウは言 [eh] イヌ、イグ、イク、イユク、ユクは行 [yin] イハは岩 [eh] エは絵 [we] シブは渋 [sip] ウマ、ウメ、ムギ、メは馬 [ma] 梅 [me] 麦 [muk] 目 [me] 等。研究がすすめばすすむほど、日本語はほとんどみな外来語ばかり、ということになるではなからうか、とはわたくしの持論的仮説である。

現代は日本の外来語中第二のおおきな資源をもつ。それは一五三〇年南蛮人の渡来にみなもとを發した欧米の語である。すなわち、明治以前の葡・西・蘭等の諸語、明治以後の英・「米」・仏・独・伊・露等の諸語である。これらのうち断然ブレドミネートしているのは英語である。普通、今日日本で単に外来語といえばこの第二のグループを意味する。さらにすすんで、ときには外来語とモダン語とシノニムでさえあるばあいもある。

かつ、特に現代文章とのみ関連するのは、あたらしい外来語にかぎるわけであるから、本文では主としてあたらしい外来語、いわゆるモダン語、を対象とする。